

離島移住のプロセスに関するライフスタイル移住研究 —インタビュー調査で得た隠岐の島町移住者の語りを事例に— 島根県立大学 人間文化学部 地域文化学科4年 荒井さくら

1. 研究背景

島根県隠岐の島町は私の出身地であり、年々人口減少の課題に直面しているのが現状である。そこで隠岐の島町で移住定住対策、地域おこし協力隊の受入れがどのように行われているかを把握し、「移住の長期化」という目線で、今後の隠岐の島町の未来の鍵になる地域おこし協力隊の方々にインタビュー調査をおこなった。インタビューでは主に、移住のきっかけ、移住中の生活、地域おこし協力隊任期満了に伴う今後の生活など、移住者には様々な選択があり、その時々の「プロセス」に着目した。

2. ライフスタイル移住における離島移住の位置づけと隠岐の島町の取り組み

離島移住は、より良い生活の質が満たすためのライフスタイル移住に分類される。さらに、離島地域は大都会に比べ、住民一人ひとりの存在が相対的に高まる地域であるため、「他人から必要とされる」という「生きがい」も移住の動機に入ると考えられる。さらに、ありのままでいられる個人的居場所と、役に立っているという社会的居場所を獲得していくプロセスは、離島独自のライフスタイル移住ともいえるのではないだろうか。

隠岐の島町では、定住増加のためにUターンフェアへの参加や定住相談員の配置、移住希望者向けツアーの企画や「お試し住宅」の提供といった取り組みが進められている。一方で、地域おこし協力隊お試し体験の方へのアンケート調査では、住まいや勤務内容、地域の様子が曖昧であることが判明し、移住後の理想と現実のギャップが生まれる可能性もあると考える。

3. 移住者紹介

①加藤翔(かとうしょう)さん

広島県広島市出身で、2020年から隠岐の島町に移住し、同年4月から地域おこし協力隊に就任。2023年3月をもって退任し、翌月に、古着屋「elves clothing store」の経営をしている。来島時に、隠岐の島町には若者の遊び場がないことに気づき、これまでのキャリアを活かし、島にはない新しいものや都会のエッセンスを提供することで「生きがい」を得ている。隠岐の島町の人と関わってみて、無償のおすそ分けのあたたかさや自分に会いに来てくれる人たちとの縁から最も人間らしい生活ができると実感している。



お仕事中の加藤さん
2024年10月24日筆者撮影

②瀧川拓己(たきがわたくみ)さん

広島県広島市出身で、2024年から隠岐の島町に移住し、現在は地域おこし協力隊として隠岐の島町役場地域振興課に所属している。釣りやキャンプが趣味であり、隠岐の島町は週末の楽しみをそのまま持ってきたような生活が出来ているため、特別な空間になっている。地域の中では、過去の解体業の経験から危険な現場でも活躍し、特に作業が困難な高齢者にとっては必要な存在であるため、頼りにされる生きがいと趣味の充実という面から居場所を獲得していることが分かる。

4. 移住者がもたらす地域への影響と 行政の今後の展望

隠岐の島町にとって移住者は、人口減少を食い止める存在だけでなく、先住民が気づけていない創造力やおもてなしの指摘をして島を生まれ変わらせてくれる必要な存在である。

行政は、移住前における情報発信の内容の指摘が多く、特に居住地域の情報や特色がHPやSNSで詳しく記載されていない。町の広報には、地域の祭りや行事が詳しく載せられているため、情報の提供の仕方を工夫する必要がある。

参考文献

- 小田切徳美(2014)『農山村は消滅しない』岩波書店
- 今の裕昭(2022)『海外ライフスタイル移住の社会的意味』専修人間科学論集 社会学篇 専修大学人間科学学会 12-2 .pp19-35
- 谷川典大(2004)『大島諸島への移住者とコミュニティ—ショート・ライフヒストリーと「語り」—』人文地理 京都:人文地理学会:56-4,pp63-79
- 石本雄真(2010)『こころの居場所としての個人的居場所も社会的居場所—精神的健康および本来感、自己有用感との関連から—』「カウンセリング研究」日本カウンセリング学会 43,pp72-78